

保育内容指導法の検討

—「環境による教育」と「遊びを通しての総合的な指導」に着目して—

A Study of Childcare Contents Instruction Method: A Focus on Environment-based Education and Comprehensive Instruction Through Play

金山 美和子

Miwako KANAYAMA

要旨

本論文は幼稚園教育の基本をふまえ保育内容の指導法のあり方について検討することを目的とする。「環境による教育」と「遊びを通しての総合的な指導」に着目し事例を検討することにより、保育内容の指導法のあり方を探るものである。具体的には、公立幼稚園において収集した5事例について考察を行った。

事例においては、保育者は環境を構成し、自身も環境の一部として近くで子どもを見守る場面や、遊びの中にあっても子どもからの働きかけに応える場面、仲間の一員となって遊ぶ場面が多くみられた。また、保育者は環境構成に加え、子どもの遊びの様子から次の遊びの展開を予測し、遊び道具を補足したりといった援助を行っていることが示された。環境による教育においては、子どもが自ら対象とかかわることが大切であるため、このような間接的なかわりが多くみられたと考えられる。そして、子どもが、使いたいものを使いたい時に使うことができるような配置が行われていた。これは同時に、子どもが遊びにおいてやりたいことを実現できることでもあり、遊びを通して様々なことを学ぶための援助としても重要であると思われる。

キーワード：保育内容、指導法、環境、遊び

I. 問題と目的

平成27年度より子ども・子育て支援制度がスタートし、認定こども園の普及や地域型保育の実施が図られている。依然として待機児童問題は深刻であり、都市部では、保護者が入所選考の際に少しでも有利になるよう就労条件を変更したり、入所しやすい地域に引っ越しをしたりするなどの「保活」が行われている状況である。子どもを受け入れるための「保育の量」の確保と同時に保育者不足も深刻化している。このような現状から保育の質の維持・向上が喫緊の課題となっている。横山(2007)は、現在の変革によってもたらされるものは、「保育とは何か」という本質が変化する可能性を含んでおり、これからの保育は、そうした背景の中にあることを考慮しなければならないと指摘している。そして、保育の本質を見失わないためには、長期にわたって幼児の発達の連続性をとらえるという視点を保ち続けること、保育の本質を常に保ち続けることが必要である¹と述べている。

本研究においては、保育の本質を考えるための手立てとして、幼稚園教育の基本をふまえ保育内容の指導法のあり方について探るものである。幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園教育の基本において、幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする²と示されている。そして幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすることとある。これらのことから本稿では「環境による教育」と「遊びを通しての総合的な指導」に着目し事例を検討することにより、保育内容の指導法のあり方を探っていきたい。

II. 環境による教育と遊びを通しての総合的な指導

1. 環境による教育

幼稚園教育要領解説では、環境を通して行う教育の意義として、幼稚園教育においては、教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、その環境に関わって幼児が主体性を十分発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること、すなわち、「環境を通して行う教育」が基本となる³と示されている。そして、環境による教育の特質についてつぎのように記されている⁴。

幼児が自ら心身を用いて対象にかかわっていくことで、対象、対象とのかかわり方、さらに、対象とかわる自分自身について学んでいく。幼児の主体性が何よりも大切にされなければならない。そのためには、幼児が自分から興味をもって、遊具や用具、素材についてふさわしいかかわりができるように、遊具や用具、素材の種類、数量及び配置を考えることが必要である。

環境とのかかわりを深め、幼児の学びを可能にするものが、教師の幼児とのかかわりである。教師のかかわりは、基本的には間接的なものとしつつ、長い目では幼児期に幼児が学ぶべきことを学ぶことができるように援助していくことが重要である。また、幼児の意欲を大事にするには、幼児の遊びを大切に、やってみたいと思えるようにするとともに、試行錯誤を認め、時間を掛けて取り組めるようにすることも大切である。教師も環境の一部である。教師がモデルとして物的環境へのかかわりを示すことで充実した環境とのかかわりが生まれてくる。

このように、環境による教育とは、遊具や用具などを整えることだけではなく、幼児が自発的に環境にかかわり、試行錯誤を繰り返し、環境へのふさわしいかかわり方を身につけることであり、それを援助する保育者も環境を構成する重要な要因として位置づけられているといえよう。

2. 遊びを通しての総合的な指導

遊びを通しての総合的な指導については、幼稚園教育要領解説において「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「一人一人の特性に応じた指導が行われるようにすること」とともに、幼稚園教育の基本に関して重視する事項として挙げられている。自発的活動としての遊びは幼児期特有の

学習であり、幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。そして、具体的な指導の場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的にとらえ、発達にとって必要な経験が得られるような状況をつくることを大切にしなければならない。そして、幼稚園教育のねらいが総合的に実現するように、常に幼児の遊びの展開に留意し、適切な指導をしなければならない⁵と述べられている。

これらのように保育者は、子どもが遊びを通して総合的に発達し、学習することをふまえた指導を行うことが求められているのである。

III. 事例の考察

1. 事例収集の概要

(1) 対象と期間

新潟県内の公立幼稚園の3歳児クラス、4歳児クラスを対象とした。調査期間は2012年6月から2015年10月である。

(2) 事例収集の手続き

登園からお昼までの保育を観察し記録を行なった。事例を収集する際に感じた不明な点については、担任保育者にインフォーマルなインタビューを行ない補足した。

事例1：4歳児 製作コーナー

製作コーナーには、ノリやハサミなどの工作道具、牛乳パックや発泡スチロールトレイなどの素材が用意された棚があり、その前にはテーブルと椅子が設置されている。

A子は、製作コーナーで牛乳パック、ビニール袋、ストローを使いびっくり箱を作っていた。小学生の兄から作り方を教えてもらったといい、一人で手際よく作っている。そこに、B子がやってきて白い画用紙にお姫様の絵を描き始めた。A子はB子の方をちらっと見たが自分の製作に取り組んでいた。

B子は、お姫様の絵を描いていた手を止め、隣のA子がストローを付けたビニール袋を牛乳パックに入れる様子をじっと見つめていた。そして、A子がストローを吹きビニール袋が膨らむ様子を見ると、画用紙に描いたお姫様の横に急いでお化けの絵を描いた。

B子：「A子ちゃん、これ貼って。」とA子にお化けの絵を示した。

B子「外はお姫様だけど、中からお化けが出てくるのにしようよ。」
 A子はしばらく、B子が描いた絵を見つめていた。
 A子「うん。いいよ。」とお姫様とお化けをハサミで切り取り、びっくり箱の外側にお姫様の絵を、中から出てくるビニール袋にはお化けの絵を貼り、ストローを吹いてお化けを膨らませB子に見せた。
 B子：「A子ちゃん、すごいよ。お化けが出た」
 A子：「お姫様なのに、びっくり！おばけになった」二人は箱の外側のお姫様の絵とビニール袋に貼ったお化けの絵を見比べていた。

当初、製作コーナーでA子はびっくり箱の製作、B子はお姫様の絵を描いていた。A子が作るびっくり箱に興味を示したB子は、お化けの絵を描きびっくり箱に貼ることをA子に提案し、びっくり箱づくりに参加している。この保育室には製作コーナーにテーブルと椅子が配置されており、子どもは自然とその場に座り思い思いの製作に取り組んでいる。この事例の他にも、一つのテーブルにつくことで他の子が作っているものに興味を示したり、真似をしたり、後からやってきた子どもが興味を示し「何作ってるの?」「私も同じの作りたい」と隣に座って一緒に製作を始める場面もみられた。友だちが何をして遊んでいるのかに関心を示す子どもが多いことが示された。そして、コーナーの配置の仕方を工夫することで、子ども同士が自発的にかかわり遊びが展開されることが分かった。

事例2：3歳児 積木あそび

登園時C男は保護者と離れるのが嫌だといって泣き、しばらく保育者と手をつないでいた。やがて積木を出して遊び始め、高く積み重ねていった。次第に集中し、崩さないようにバランスを取りながら手元にあった最後の積木をそっと置こうとした。その様子を近くで見ていたD男も一緒に息をひそめてC男の手先と積木を見つめていた。C男は最後の積木を載せるとほっと安堵のため息をついた。そしてD男の方に顔をむけると、二人は同時ににっこりと笑いあった。

D男がC男の隣に駆け寄ると、C男は積みあがった積木を手で払った。積木が崩れ大きな音がすると、二人は「きゃー」と歓声をあげて笑い合った。

そして今度は二人で積木を高く積み上げた。C男はまた積木を手で払い、二人は歓声をあげて笑いながら、崩れる積木から逃げるように後退した。近くで見守っていた保育者が声をかけた。
 保育者：「CちゃんもDちゃんも、元気な笑い声で楽しそうね。」
 C男「先生、見ててね。ガッシャーんっていうから。」
 D男「見ててね。ガッシャーんってなるよ。」
 と二人は答えると、積木を積んでは倒す遊びを繰り返した。

保育者は、登園時に不安定な気持ちでいたC男と手をつないで一緒に過ごすことでC男の気持ちが安定し遊びに向かうのを待っている。しばらく後、C男は積木で遊び始める。そして積木を積むことに集中しながらも、それをD男が見ていることに気付いている。D男は、C男が積木を積んでいる様子をじっと見守り自分も倒れないように積木を積む緊張感を共有しているようであった。二人は、積木を積み上げる緊張感とそれが成功した喜びを共有し、その後、積木を崩して歓声をあげて笑い合い、緊張と発散を繰り返し楽しんでいと推察される。保育者の声掛けに対しC男が答えた内容と同じ答えをD男が答えており、友達と同じことをすることが楽しい様子が理解できる。

積木を大切に使う遊ぶことに着目すれば、繰り返し積木を倒す二人の遊び方には何らかの指導が必要であったとも考えられるが、保育者は危険がないように配慮しながら禁止することなく見守り、二人が楽しそうにしている様子を言葉にして伝え、C男とD男が友達と遊ぶ楽しさに気付くようにしていた。6月は入園当初に比べ、安定した気持ちで登園するようになる子どももいれば、まだ保護者と離れられずに不安定な気持ちになる子どももいる時期である。また、次第に友だちに興味を持ち始める時期でもあることから、保育者は、自発的に遊びにかかわることや、友達とかかわることの楽しさを実感することへの援助を行っていたものと考えられる。

事例3：3歳児 ジュース屋さんごっこ

3歳児保育室前の砂場にはテーブルと椅子が配置されている。砂場の遊び道具として、シャベル、スコップ、ふるい、型抜き用の型、ガスレンジ、鍋やフライパン、フライ返しなど調理器具を用意

している。保育者は、一週間前程から、泥水をジュースやコーヒーに見立てて遊ぶ子どもの様子を見て、500ml ペットボトル容器、ドリンクヨーグルト容器、じょうご、計量カップ、すり鉢とすりこ木を用意した。

E子は鍋に砂と水を入れてかき回し、保育者に向かって言った。

E子：「先生、見て。アイスコーヒー出来たよ。」

保育者：「あらおいしそうね。今日は暑くて喉がかわいたから、一杯くださいな。」

E子：「はい。少々お待ちください。」とペットボトルの口にじょうごをつけ、泥水を流し込んだ。そこにF子とG子がやってきた。

F子：「私もジュース作りたい。」

G子：「私も。いちごジュースがいいな。」

F子：「じゃあ、赤いお花取って来よう。」とG子と一緒に玄関前のプランターに咲いているベゴニアの花びらを3、4枚摘み取ってきた。

G子：「先生、見て！赤くなったよ」

保育者はすり鉢をのぞき込み、

保育者：「本当だ！赤いね。」とG子と顔を見合わせた。

保育者：「F子ちゃんのも赤くなってきたね。」とF子のすり鉢の中も見て声をかけた。

G子とF子は、テーブルに戻るとすり鉢とすりこ木を使って花びらをつぶし、水を少し注ぎ再びすりつぶすとドリンクヨーグルトの空き容器に注ぎ入れた。透明な容器に入ったピンク色の液体を見て

F子：「いちごジュース出来ました。」と保育者の方を向いた。

G子：「なんだかい匂いがするよ。」と鼻を近づけた。その様子を見ていたE子は、

E子：「先生、今度はいちごコーヒー作りますから待っててください。」と言い、ベゴニアの花びらを取りに行った。

対象園では、子どもが自ら興味や関心をもって環境に取り組むことができるよう、遊具や用具、素材の配置や数量に関する検討に取り組んでいる。本事例においても、すり鉢やすりこ木、じょうごなど一般家庭でも普段使用する機会の少ない生活用品が遊び道具として用意されている。

E子が鍋の中の泥水をアイスコーヒーに見立て、ペットボトルに入れようとした際にはじょうごを用いてこぼれないように注いでいた。また、ピンク色

の液体をつくるため、F子とG子はすり鉢とすりこ木で花びらをすりつぶしている。他の場面では、木の実や草をすりつぶして水を加え、どのような色に変化するかを何度も試す幼児の姿もみられた。遊びの展開に応じて道具を準備することにより、子どもは興味をもった遊びに積極的にかかわることができるようになるのだと考えられる。勿論、道具がなくても遊ぶことはできる。しかし、やってみたいという幼児の意欲を大事にするには、それが実現できる環境を整えることが肝要である。自然物を用い、何度も試行錯誤することができる遊びの環境があつてこそ、遊びを通しての総合的な指導が可能になるものと思われる。

対象園では、玄関や園庭で栽培しているプランターの草花は観賞用だけでなく、子どもが遊びに使用してもよい素材として捉えられていた。「花を摘み過ぎて、きれいなお花が見られなくなってしまわないように気を付けて使う」という約束をしているそうである。子どもたちは「お花さん、ちょっと花びらを使わせてね」などと声をかけながら花を摘んでいた。近年では、空き地や原っぱなどで草花を摘んで遊ぶ機会を得られる子どもはごく少数であると推察される。咲いている花を摘んで遊びに使うという経験は、保育者や園がそのような環境を設定することで実現していることがわかった。

小谷（2013）は、実践や選考研究を整理する中で、科学性の芽生え、造形とイメージなど様々な育ちの視点がわかり、現行の幼稚園教育要領で示されている「遊びを通した総合的な指導」の場として、砂場が大きな意義をもつものであることを推察できた⁶と報告している。本事例においても、砂や花びらを使って色水を作ることで、子どもは自然物とのかかわりを深めている。花びらをすりつぶした色を観察し、ピンク色の液体を見て「いい匂いがする」と鼻を近づけてみるなど五感を活用している姿がみられた。また、保育者をお客に見立てアイスコーヒー屋になったり、ジュース屋になったりして、ごっこ遊びの掛け合いをしていた。一つの遊びのなかで子どもは様々な体験をし、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていくことが示された。

事例4：4歳児 アゲハチョウの幼虫

保育室の観察台に飼育ケースが置かれていた。中にはアゲハチョウの幼虫が3匹と葉のついた木

の小枝が入っていた。H男は飼育ケースのふたを開け、幼虫をそっと手の上にのせ、隣に座っている保育者に言った。

H男：「先生、アゲハの幼虫ってどこが目だかわかる？ぼく知ってるよ。この小さい点のところなんだよ。」と幼虫の頭の部分を指差した。

保育者：「まあ、そうなの。先生知らなかった。

Hくんどうして知ってるの？」と聞くと

H男：「この図鑑に書いてあったの。」と観察台の上にあったポケット図鑑を示した。そして、

H男：「先生、よく見て。虫眼鏡で見たら、口のところがもぐもぐしているのがよく見えるよ。」と首に掛けていた虫眼鏡を保育者に渡し、保育者によく見えるように幼虫を乗せた手のひらを差し出した。

保育者：「本当だ。もぐもぐしてるね。」

H男：「ね。幼虫って何を食べるのかなあ」と観察ケースをのぞき込み幼虫と一緒に入っていた木の小枝を取り出した。木の小枝には幼虫が2匹ついていて葉を食べていた。H男はそれを見つけると

H男：「あ、葉っぱ食べてる。すごく早く口を動かしてる。」と興奮した様子で話しながら幼虫を見つめていた。

保育者：「この木の枝はね、山椒っていうの。丸い小さな実も沢山ついているでしょ。アゲハの幼虫、葉っぱを沢山食べてるね。」

H男：「山椒っておいしいの？どんな味かな？」

保育者：「そうね、どんな味かしらね。」

H男は山椒の枝を持ち上げて鼻を近づけて言った。

H男：「なんだかみかんみたい。」と山椒の実を指でつまみ匂いを確かめていた。

保育者：「本当、Hくんの言ったとおりだ。さわやかな感じの匂いね。」

H男：「どんな味だか食べてみようか？」と保育者の顔をみた。保育者は微笑んで

保育者：「Hくん、ちょっとだけ食べてみて」と答えH男が山椒を口に入れる様子を見ていた。H男は山椒をつまみあげてそっと口に入れると

H男：「わあっ。プリッとしてなんだかピリピリするよ。先生も食べてみて。」と言った。保育者はH男が見守る中、山椒を口に入れ

保育者：「わあ大変！口の中がピリピリしてきた。」とH男と顔を見合わせた。

H男：「アゲハの幼虫は苦くないのかな？この葉っぱがおいしいのかな？」と幼虫に話しかけるように言った。

H男は、昆虫が大好きで日頃からよく虫眼鏡を首にかけている。保育室で飼育しているアゲハチョウの幼虫の他に既にさなぎになっているものもあり、H男は登園すると毎日アゲハチョウの幼虫を観察していた。保育者が図鑑や虫眼鏡を用意することでH男は幼虫への興味を深め、熱心に図鑑を見たり、幼虫を観察したりするようになった。子どもが対象にはたらきかけるための環境設定により更に対象への興味関心が深まった事例である。

またH男は、山椒の葉を食べる幼虫を観察しながら、山椒がどのような味なのか疑問に思い、保育者に相談しながら山椒の味を確かめている。保育者は「それは食べると苦いのよ。」と予め注意を促すのではなく、「食べてみたい」というH男の興味を尊重し、「ちょっとだけ食べてみて」と答えていた。この場面で保育者は、山椒の実が食べられるものでありその匂いや辛さについての知識をもってH男の援助を行っているものと推察される。

H男は、山椒の実を目で見て匂いと味覚で理解しようとしていた。このような科学的な探求心だけでなく、幼虫が山椒を食べて「苦くないのかな」「おいしいのかな？」と心配していることから、相手の立場に立ってものごとを考えたり他者の気持ちを理解しようとしたりする姿が見受けられる。

事例5：3歳児 砂場での温泉づくり

保育室前の砂場で、2人の子どもがスコップで穴を掘っていた。

I子：「深い、掘ろう。どんどん掘って地球の真ん中まで掘ろう。」とJ男に声をかけた。

J男：「地球の真ん中にはマグマがあるんだよ。熱いんだよ。」と向かい合って砂を掘った。しかし、砂が乾いているためスコップで掘っても側面の砂が崩れ落ちてしまい、なかなか深い穴にならない。

I子：「ちっとも深くならないね。」

J男：「地球の真ん中は深いんだよ。まだまだ見えないよ。」

2人の近くではK男と保育者がジョウロに入れた水で砂を湿らせおだんごを作っていた。K男は保育者におだんごを見せ

K男：「おだんご、出来たよ。」と言った。

保育者：「丸いおだんごが出来たね。おいしそうね。」

Kちゃん、どうやったらおだんごが丸くなるの？先生のは、すぐに崩れちゃうのに。」

K男：「砂にね、お水入れたらかたくなるんだよ。だからおだんごがかたまるの。」
 保育者：「そうなんだ。お水を入れると砂がかたくなるんだ。Kちゃん、大発見だね。」
 保育者：「Kちゃん、その大発見をI子ちゃんとJ男くんにも教えてあげてくれる？」とI子たちの方を見た。K男はうなずくとジョウロを持って2人のそばに行くと言った。
 K男：「Iちゃん、お水入れると砂がかたまるよ。」
 I子：「うん。入れて。」とI子とJ男はK男が穴に水を注ぐのを興味深くみていた。穴の底に水が少し溜まったのを見て
 I子：「わあ、池みたい。」
 J男：「お風呂みたい」
 I子：「うん、温泉みたい。」と歓声をあげた。しかし、すぐに水は砂に浸み込んでしまった。
 I子：「Kくん、お水無くなっちゃった。」
 K男は水道まで走っていきジョウロに水を汲んでくるとまた注ぎ入れた。
 I子とJ男は外履きを脱ぎ、穴の中に足を入れ、
 J男：「温泉だ。」
 I子：「温泉だ。いい気持ち。」と足踏みをした。
 J男：「あ、また水が消えた。Kくんジョウロ貸して。」とJ男はK男のジョウロを持つと水を汲みにいった。K男も外履きを脱ぎ、3人は穴に溜まった水の中に立った。
 J男：「温泉で一す。」
 I子：「早く来ないと消えますよ。」
 K男：「気持ちいいですよ。」と保育者に呼びかけながら足踏みをした。

対象園では、砂の性質に着目し砂の入れ替えを試みたそうである。水を含むと固まりやすい性質をもつ砂を砂場に入れることでトンネルが掘りやすくなったり型抜きがくずれにくくなったりしたことである。また、砂場だけでなく粘土質の土の山を園庭に配置し泥団子づくりができるような環境も整えられている。このように、子どもが関わりたいという意欲を示すような素材を検討することも保育者の援助として重要であると思われる。

この事例では保育者は、乾いた砂が崩れてしまうという課題に直面しているI子とJ男に対し、直接助言を行うのではなく、水で砂が固まるという知識と経験をもつK男に「その大発見をI子ちゃんとJ男くんにも教えてあげてくれる？」と依頼している。

この援助により、K男、I子、J男の3人での温泉ごっこが始まった。遊びの展開においては、環境を整える援助と同様に子ども同士をつなぐきっかけとなる援助も大切であるといえよう。

IV. 全体考察

環境による教育と遊びを通しての総合的指導に着目し、保育における指導のあり方を探ってきた。どの事例においても保育者は環境を構成したり、子どもの遊びの様子から次の遊びの展開を予測し、遊び道具を補足したりといった援助を行っていることが示された。環境による教育においては、子どもが自ら対象とかかわることが大切であるため、このような間接的なかかわりが多くみられたと考えられる。そして、子どもが、使いたいものを使いたい時に使うことができるような配置が行われていた。これは同時に、子どもが遊びにおいてやりたいと思ったことを実現できることでもあり、遊びを通して様々なことを学ぶための援助としても重要であると思われる。

また、事例においては、保育者が一方的に主導したり指示したりする姿はみられなかった。近くで子どもを見守る場面や、遊びの中にあっても子どもからの働きかけに応える場面、仲間の一員となって遊ぶ場面が多くみられた。そして、子どもが他の子どもとかかわったり、他の子に関心をもつきっかけとなるような援助を行っていた。その影響からか事例では子ども同士の関わり合いが多く見受けられた。子どもの自発的な遊びにおいては、人間関係が培われる機会が多く得られるのではないかと考える。

石倉（2008）は自然にかかわる遊びの環境に着目し、幼児の実態や興味をとらえた上で、自然の中にある様々な要素を意識できるようにすること、また、かかわることができるようにすること、そのような物的・心理的な環境を整えることが、幼児の育ちを支えると共に保育者としての役割となる⁷と述べている。子どもがかかわる対象を用意するだけでなく、子どもが対象とかかわりたくなるような心理的な環境を整える援助も重要であると思われる。

引用文献

- ¹ 横山文樹（2007）幼稚園教育の基本と指導法に関する考察・昭和女子大学初等学科・子ども教育学科紀要No.800. 63
- ² 幼稚園教育要領〈平成20年告示〉. フレーベル館. 4

- ³ 幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 25
- ⁴ 同上書. 28-29
- ⁵ 同上書. 30-34
- ⁶ 小谷宜路 (2013) 幼児教育における「砂場」の教育的意義に関する研究—幼児の育ちをとらえる視点と環境を構成する視点—. 埼玉大学教育学部附属教育実践房合センター紀要 12 号. 52
- ⁷ 石倉卓子 (2008) 保育内容の指導に関する一考察～自然とかかわる保育環境を通して～. 富山短期大学紀要第 43

巻. 9

謝辞

本研究にご協力くださった幼稚園の先生方、園児の皆様へ感謝申し上げます。

(平成 28 年 4 月 4 日受付、平成 28 年 5 月 23 日受理)

